

鄧石如における隸書筆法形成の理解への試論 (I)

An essay to understand how Deng Shiru's brushstroke of clerical script was formed (I)

遠藤 昌弘

Masahiro Endo

目次

前言 (I)

1. 鄧石如の有紀年隸書作品目録 (I)
 2. 鄧石如隸書作品の形態における特徴 (I)
 3. 鄧石如以前とその後の隸書の概観 (I)
 4. 鄧石如の隸書への諸家の言及 (II) ①
 5. 鄧石如の人物交流からみた書法の影響 (II)
 6. 鄧石如の有紀年隸書作品からみた書風の変遷 (II)
- 結語 (II)

①第四章以下は、次号に掲載する。

前言

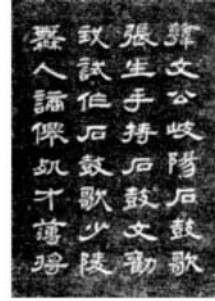
鄧石如は、乾隆八年 (1743) 安徽省懷寧県 (いまの懷寧県五

横郷白麟村) に生まれる。はじめの名は琰、字を石如といった。のちに仁宗嘉慶帝の即位に際し、嘉慶元年 (1796) 五十四歳以後、その諱である顛琰を敬避して名を石如、字を頑伯に改めた。別号としては、古浣・長卿・笈遊道人・鐵硯山房・完白山人・完白山民・完白翁などを作品款識に見ることができる。

鄧石如の伝記には、孫雲桂「完白山人傳」・吳育「鄧石如傳」・包世臣「完白山人傳」・方履錢「鄧完白先生墓碑」・李兆洛「石如鄧君墓志銘」などがある。

青年のころより刻印と書を売って諸国を漫遊し、四十歳前後には梅鏐の家に寄宿して書を古典臨書によって完成させた。四十八歳、北京で劉墉や陸錫熊に賞賛されるが、翁方綱から批判されたことから北京を離れた。五十歳頃には畢沅の招きに応じ、私的な相談役となるものの三年ほどで帰郷した。六十歳のときに包世臣と出会い、嘉慶十年 (1805) 六十三歳で亡くなった。

図1 鄧石如四十四歳



1



2



12



13



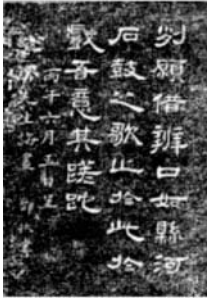
3



4



14



15

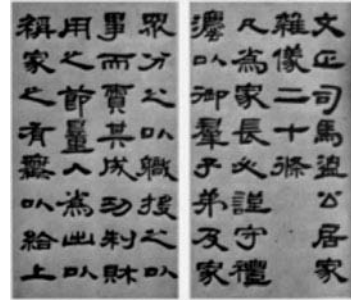
鄧石如、はじめ刻印をもって生計をたてたが、のちに篆刻家・

書家として大成した。現在までに画作の存在は一点も確認されておらず、印と書のみ精力を傾注したといえる。出身は文士の家系とされるが、祖代に科挙合格者はなく、鄧石如の交流も鄧石如本人と直接に関係を持った人物に限られる。不撓不屈ともいえる強韌な鄧石如の精神性は、そのまま印と書に反映されている。印は近代篆刻の開祖として、また書は金石書法の具現者として、とくに印・篆書・隸書作品には最高の評価が与えられている。のちに鄧石如の金石書法を継承した、呉熙載（1799—1870）・趙之謙（1829—1884）・吳昌碩（1844—1927）などに強い影響を与えた。

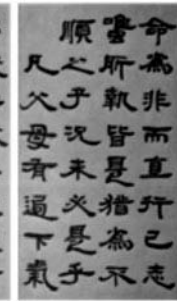
筆者（遠藤）はこれまでに鄧石如研究を行い、十二件を発表した①。本稿は、鄧石如の有紀年隸書作品を編年して、以下の項目について検討を加えたものである。

第一章「鄧石如の有紀年隸書作品目録」では、有紀年隸書作品を編年整理する。第二章「鄧石如隸書作品の形態における特徴」では、有紀年の隸書作品の作品形態を分類整理し、その特徴を検討する。第三章「鄧石如以前とその後の隸書の概観」では、鄧石如以前とその後との隸書の変遷について概観する。第四章「鄧石如の隸書への諸家の言及」では、中国と日本の主な識者の言及を取り上げ、鄧石如

図2 鄧石如四十四歳



1



8

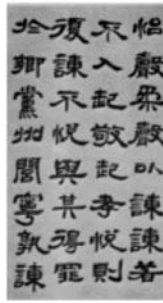
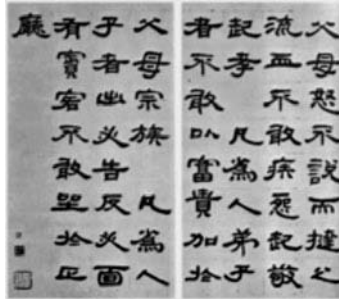
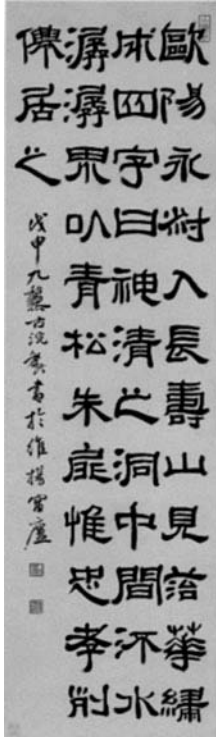
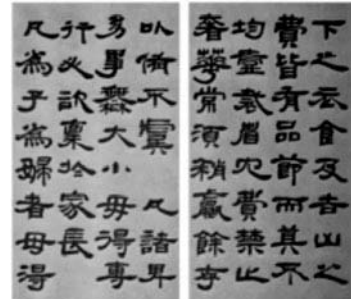


図3 鄧石如四十六歳



9



2

の隷書をどのように理解してきたかを確認する。第五章「鄧石如の人物交流からみた書法の影響」では、鄧石如自身と交流した人々の言及を取り上げる。第六章「鄧石如の有紀年隷書作品からみた書風の変遷」では、第一章から第五章までの確認と理解をふまえて、鄧石如の有紀年隷書作品からみた書風の変遷を論述する。

本研究は、大東文化大学書道研究所における兼任研究員（平成二十五年）研究計画「鄧石如研究—その芸術の意義」（平成二十六年九月・研究計画書提出／平成二十七年三月・承認済）における個別研究の一項目である。

- ①（1）鄧石如（有紀年）作品目録（『大東書道研究』第七号所収 1999 大東文化大学書道研究所）。（2）鄧石如隷書冊頁『詩經』大雅抑篇について（駒沢女子大学研究紀要）第六号所収 1999 駒沢女子大学）。（3）鄧石如揮毫品における款印と使用時期の変遷について（『大東書道研究』第八号所収 2000 同前）。（4）鄧石如行書『詩稿冊』について（『大東書道研究』第一〇号所収 2002 同前）。（5）鄧石如詩二首を読む—その推敲の変遷と文学について—（『大東書道研究』第二二号所収 2004 同前）。（6）鄧石如研究資料文献目録（『大東書道研究』第一四号所収 2006 同前）。（7）鄧石如年譜詳考（『大東書道研究』第一五号所収 2007 同前）。（8）新資料 鄧石如尺牘「陳寄鶴書」二種について（『大東書道研究』第一六号所収 2008 同前）。（9）新資料 包世臣に宛てた鄧石如尺牘について（『大東書道研究』第一七号所収 2009 同前）。（10）鄧石如の篆刻における先人の影響

図4 鄧石如四十八歳

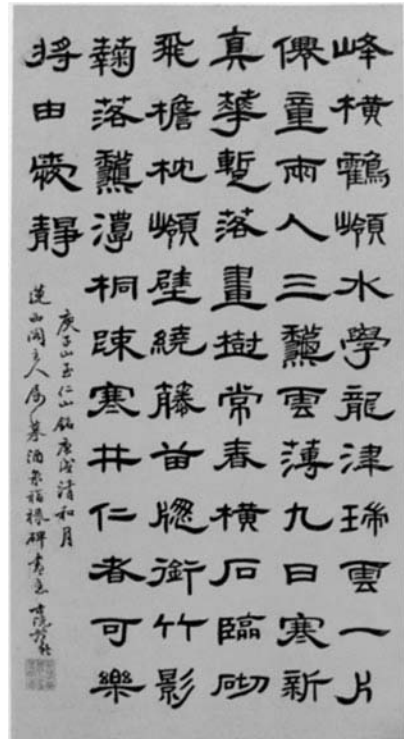


図5 鄧石如四十八歳

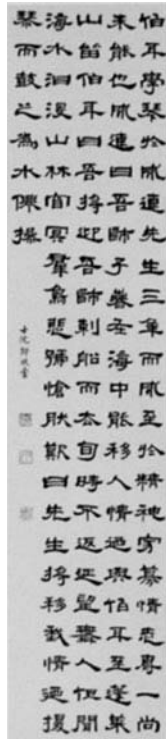
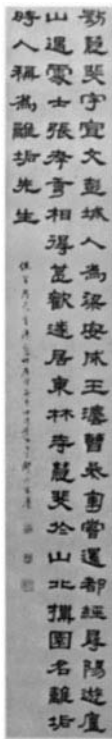


図6 鄧石如四十八歳



〔大東書道研究〕第一九号所収 2011 同前。(11) 鄧石如の篆刻における奏刀への試論〔大東書道研究〕第二号所収 2013 同前。(12) 「鄧石如における篆書筆法の形成への試論」Ⅰ〔大東書道研究〕第二号所収 2015 前同)。「鄧石如における篆書筆法の形成への試論」Ⅱ〔大東書道研究〕第三号所収 2016 前同)。

1、鄧石如の隸書作品における有紀年作品目録

図書資料・筆者(遠藤)所蔵資料より鄧石如の隸書作品を、年紀・題名・資料の順で記載した。現時点で、真蹟・拓本・摸本を含めて確認できたのは、乾隆五十一年丙午(1786)四十四歳から、没年の嘉慶十年乙丑(1805)六十三歳の九月までで三十五件であった。また乾隆五十年乙巳(1785)四十三歳以前に確認できた有紀年作品は、乾隆四十三年戊戌(1778)三十六歳にはじまり篆刻十五件・篆書二件・楷書二件の計十九件であった。

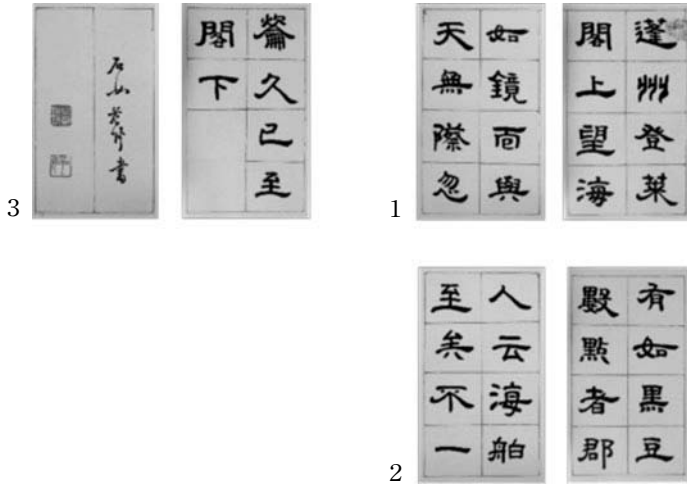
作品は、縮小図版を掲載したが全貌を把握するには不十分である。このため引用資料を付して出典を明記し、作品を確認するための補助とした。また冊本(図2・14・15・17)と一部の拓本(図1)については、冒頭の数頁と落款頁を載せるのみとした。

有紀年作品の篆刻・篆書・隸書・楷書・行草書は各年紀に作品件数を挙げるにとどめ、今回の研究対象である隸書のほかは題名など

図7 鄧石如五十歲



図10 鄧石如五十一歲



内容の詳細は省いた。

*

乾隆四十三年戊戌（1778）三十六歲

有紀年作品／篆刻1件、計1件。

乾隆四十四年己亥（1779）三十七歲

有紀年作品／篆刻1件、計1件。

乾隆四十五年庚子（1780）三十八歲

有紀年作品／篆刻6件、計6件。

乾隆四十六年辛丑（1781）三十九歲

有紀年作品／篆刻2件・篆書2件、計4件。

乾隆四十七年壬寅（1782）四十歲

有紀年作品／楷書2件、計2件。

乾隆四十八年癸卯（1783）四十一歲

有紀年作品／篆刻4件、計4件。

圖8 鄧石如五十歲

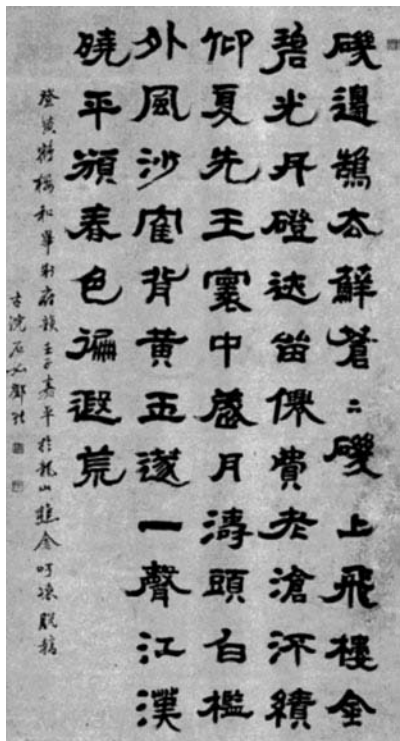
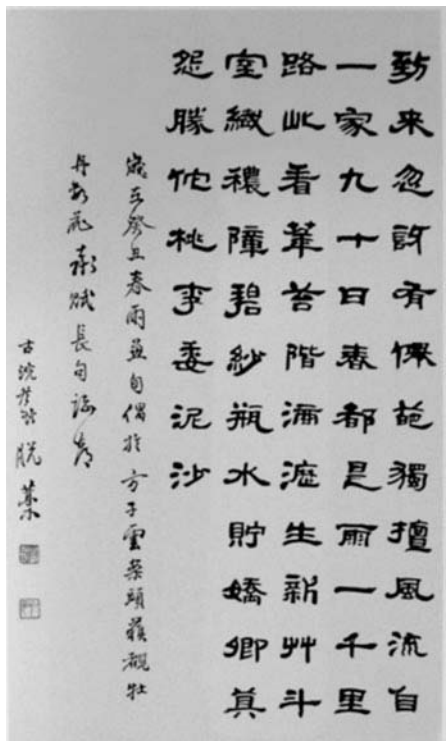


圖9 鄧石如五十一歲



乾隆四十九年甲辰（1784）四十二歲

有紀年作品／篆刻1件、計1件。

乾隆五十一年丙午（1786）四十四歲

有紀年作品／篆書1件・隸書2件、計3件。

圖1 六月。隸書（拓本 計十五紙）韓愈『岐陽石鼓歌』「韓文公岐陽……」

資料：木刻『鄧石如四體帖』・『鄧石如書法篆刻全集』第二卷（安徽美術出版社）1994

圖2 月不詳。隸書冊頁（九開）『司馬溫公居家雜儀』「文正司馬溫……」

資料：『鄧石如法書選集』（北京：文物出版社）1963

乾隆五十三年戊申（1788）四十六歲

有紀年作品／篆刻7件・隸書1件・行草書2件、計10件。

圖3 秋。隸書立幅「歐陽永叔入……」

資料：『鄧石如逝生百八十年 包世臣逝生百三十年 記念展觀圖錄』（謙慎書道會）19

85・『清朝篆隸名品展圖錄』（謙慎書道會）1998

乾隆五十四年己酉（1789）四十七歲

有紀年作品／行草書1件、計1件。

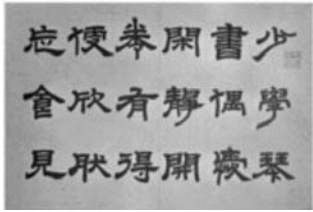
図11 鄧石如五十一歳



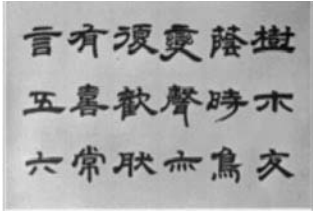
図12 鄧石如五十二歳



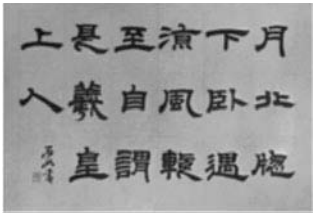
図13 鄧石如五十五歳



1



2



3

乾隆五十五年庚戌（1790）四十八歳

有紀年作品／篆刻1件・篆書4件・隸書3件・楷書2件・行草書3件（四体書四屏2件は各書体に算入）、計13件。

図4 四月。隸書立幅『至仁山銘』『峰鶴峰水……』

資料：『鄧石如書法篆刻全集』上卷（天津人民美術出版社）2005

図5 十月。四体書四屏／篆書幅「嚴君平卜筮……」隸書幅「伯耳

學琴於……」楷書幅「矯慎字仲彥……」行書幅「夏統字仲御……」

資料：『鄧石如書法篆刻全集』上卷（天津人民美術出版社）2005

図6 十一月。四体書四屏／篆書幅「周勰字巨勝……」隸書幅「劉

慧斐字宣……」楷書幅「周續之字道……」行書幅「祁嘉字孔賓……」

……」

資料：『鄧石如法書選集』（北京・文物出版社）1963・『書道藝術』第十卷（中央公

論社）1976・『安徽省博物館 鄧石如の書法とその系譜展図録』（読売新聞社・謙慎

書道会・安徽省博物館）1991

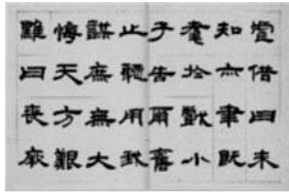
乾隆五十六年辛亥（1791）四十九歳

有紀年作品／篆書2件、計2件。

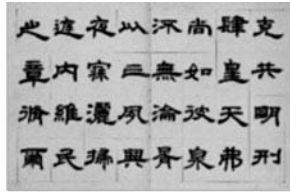
乾隆五十七年壬子（1792）五十歳

有紀年作品／隸書2件、行草書1件、計3件。

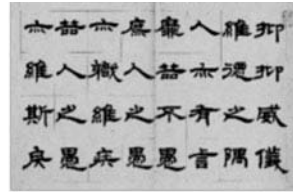
図14 鄧石如五十五歲



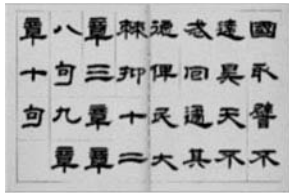
14



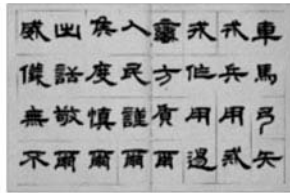
4



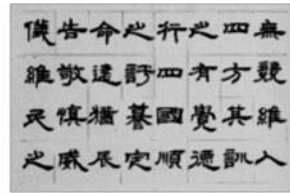
1



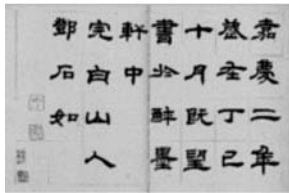
15



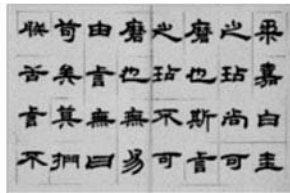
5



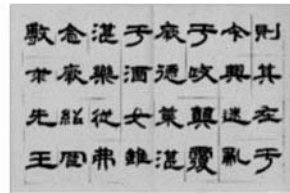
2



16



6



3

図7 秋。隸書橫披（五言絕句三種）「竟日意無賴……」

資料…『鄧石如書法篆刻全集』上卷（天津人民美術出版社 2005）

図8 十二月。隸書立幅「磯邊鶴去辭……」

資料…『鄧石如隸書集』（台北・學海出版社）1974

乾隆五十八年癸丑（1793）五十一歲

有紀年作品／篆書1件・隸書3件・楷書1件・行草書1件（四體書冊1件は各書体に算入、うち行草書尺牘は六十一歲のため除いている）、計6件。

図9 春。隸書立幅「到來忽訝有……」

資料…『鄧石如書法篆刻全集』上卷（天津人民美術出版社 2005）

図10 十月十八日。四體書冊頁（計十七開）篆書冊頁（七開）臨

『石鼓文』隸書冊頁（三開）『蓬州登萊閣……』楷書冊頁（六開）

「冠銘曰居高……」行草書尺牘（一開）「五月□□渡……」

資料…『鄧石如書法篆刻全集』上卷（天津人民美術出版社 2005）

図11 十二月二十二日頃。隸書八言聯（畢沅のための代筆）「領迴山幽流……」

資料…『鄧石如法書選集』（北京・文物出版社）1963・『安徽省博物館 鄧石如の書

法とその系譜展図録』（読売新聞社・謙慎書道会・安徽省博物館）1991

圖15 鄧石如五十七歲



1



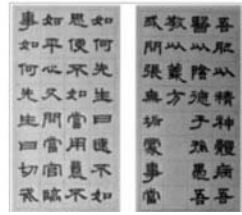
10



2



11



3



12

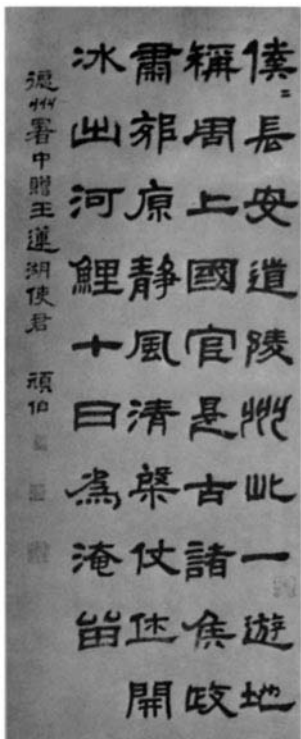


圖16 鄧石如五十九歲

乾隆五十九年甲寅（1794）五十二歲

有紀年作品／隸書1件、計1件。

圖12 秋。隸書七言聯「萬華盛處松……」

資料：『書道藝術』第十卷（中央公論社） 1976

乾隆六十年乙卯（1795）五十三歲

有紀年作品／行草書1件、計1件。

嘉慶元年丙辰（1796）五十四歲

有紀年作品／篆書1件・楷書1件、計2件。

嘉慶二年丁巳（1797）五十五歲

有紀年作品／篆刻2件・篆書1件・隸書2件・楷書1件・行草書3件（四體書冊1件は各書体に算入）、計9件。

圖13 七月十五日。四體書冊頁（計十二紙）篆書（三紙）「怪石長

松嶺……」隸書（三紙）「少學琴書偶……」楷書（三紙）「雪齋清境

發……」草書（三紙）「擇故山濱水……」

資料：『書道藝術』第十卷（中央公論社） 1976

圖14 十月十六日。隸書冊頁（十六紙）「抑抑威儀維……」

資料：『書道藝術』第十卷（中央公論社） 1976

圖17 鄧石如五十九歲

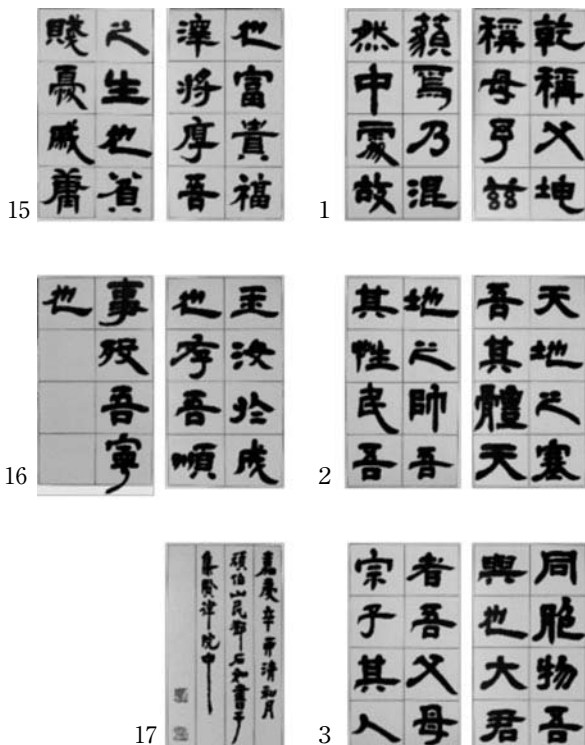


圖18 鄧石如五十九歲



嘉慶三年戊午（1798）五十六歲

有紀年作品／篆書1件・行草書1件、計2件。

嘉慶四年己未（1799）五十七歲

有紀年作品／篆書2件・隸書1件・楷書1件・行草書1件（四體書冊1件は各書体に算入）、計5件。

圖15 十一月。四體書冊頁（計四十八開）篆書（十二開）「萬綠陰

中小……」楷書（十二開）「司馬溫公云……」隸書（十二開）「焚香

看書人……」行草書（十二開）「躡蹠畦苑遊……」

資料：『鄧石如法書選集』（北京：文物出版社）1963『書道藝術』第十卷（中央公論社）1976

嘉慶五年庚申（1800）五十八歲

有紀年作品／篆書3件・行草書1件、計4件。

嘉慶六年辛酉（1801）五十九歲

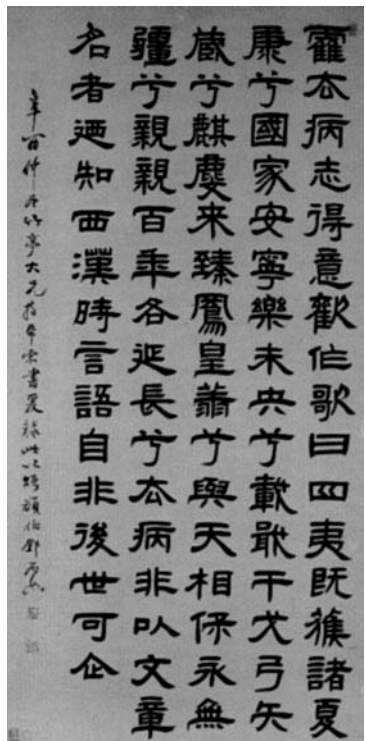
有紀年作品／篆書2件・隸書6件・楷書1件・行草書1件（四體書四屏1件は各書体に算入）、計10件。

圖16 四月。四體書四屏／篆書「隨意出南郭……」隸書「僕々長安

圖19 鄧石如五十九歲



圖20 鄧石如五十九歲



道……」楷書「懷抱屬不展……」草書「楚山靜寥廓……」

資料：『鄧石如法書選集』（北京：文物出版社）1963

圖17 四月。隸書冊頁（三十三紙）『張氏西銘』『乾稱父坤稱……』

資料：『鄧石如書法篆刻全集』上卷（天津人民美術出版社）2005

圖18 七月十六日。隸書八言聯「甘露卿雲於……」

資料：『金石家書畫集』第二集（西泠印社）1935·『鄧石如隸書集』（台北：學海出版社）1974

圖19 冬。隸書立幅『贈旬園』『清源之體勢……』

資料：『鄧石如書法篆刻全集』下卷（天津人民美術出版社）2005

圖20 十一月。隸書立幅「霍去病志得……」

資料：『鄧石如逝生百八十年 包世臣逝生百三十年 紀念展觀圖錄』（謙慎書道會）1985

85·『清朝篆隸名品展圖錄』（謙慎書道會）1998

圖21 十二月二十四日。隸書立幅「絕照覽心圓……」

資料：『鄧石如法書選集』（北京：文物出版社）1963

嘉慶七年壬戌（1802）六十歲

有紀年作品／隸書4件·行草書2件、計6件。

圖22 五月。橫額隸書（拓本）『集賢律院』

資料：『鄧石如的書法藝術』穆孝天（人民美術出版社）1991·『鄧石如書法篆刻全集』下卷（天津人民美術出版社）2005



図22 鄧石如六十歲

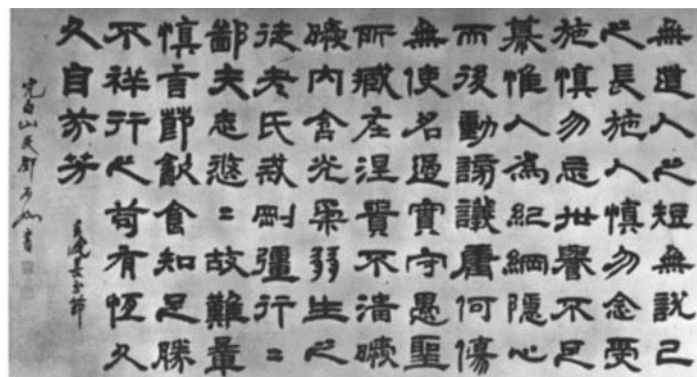


図25 鄧石如六十歲

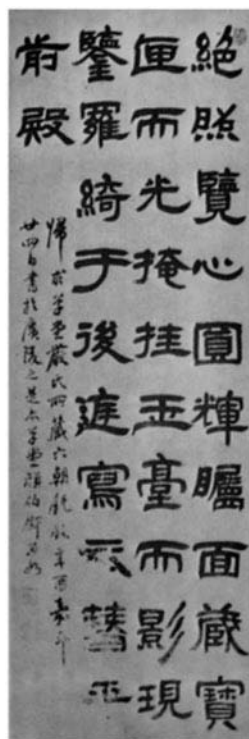


図21 鄧石如五十九歲

十二月。隸書八屏「廬山東林法……」

資料…『鄧石如隸書慧遠傳』(台北・書藝出版社) 1983・『鄧石如逝生百八十年 包

世臣逝生百三十年 記念展観図録』(謙慎書道会) 1985。

図24 十二月二十二日頃。隸書立幅「懷抱屬不展……」

資料…『鄧石如法書選集』(北京・文物出版社) 1963。

図25 十二月二十二日頃。隸書橫披「崔子玉座右銘」「無道人之短

……」

資料…『定本書道全集』第十三卷(河出書房新社) 1956・『鄧石如逝生百八十年 包

世臣逝生百三十年 記念展観図録』(謙慎書道会) 1985

嘉慶八年癸亥(1803)六十一歲

有紀年作品/篆書3件・隸書2件・行草書4件(五十一歳の四体書冊1件のうち行草書尺牘は、六十一歳のため算入している)、計9件。

図26 二月十五日。隸書冊頁(五紙 拓本)『宿集賢律院作。』『竹樹陰濃凡……』

資料…『完白山民隸書碑帖』・『鄧石如書法篆刻全集』第二卷(安徽美術出版社) 1994。

図27 秋。隸書四屏『寄懷師荔扉明府詩』『穉來漸次起……』

資料…『鄧石如法書選集』(北京・文物出版社) 1963・『鄧石如隸書集』(台北・學海出版社) 1974・『書道藝術』第十卷(中央公論社) 1976。

図23 鄧石如六十歲



嘉慶九年甲子（1804）六十二歲

有紀年作品／篆刻1件・篆書3件・隸書3件・行草書4件、計11件。

図28 四月。隸書立幅「戰々慄々日……」

資料：『鄧石如法書選集』（北京・文物出版社）1963・『鄧石如隸書集』（台北・學海出版社）1974・『書道藝術』第十卷（中央公論社）1976

図29 秋。隸書聯「滄海日赤城……」

資料：『鄧石如隸書集』（台北・學海出版社）1974・『書道藝術』第十卷（中央公論社）1976

図30 十月。隸書八屏『西都賦』『前乘秦峰後……』

資料：『鄧石如書法篆刻全集』下卷（天津人民美術出版社）2005

図31 十一月下旬。隸書七言聯「元龍未除湖……」

資料：『鄧石如隸書集』（台北・學海出版社）1974

嘉慶十年乙丑（1805）六十三歲

有紀年作品／篆書7件・隸書5件・楷書1件・行草書1件、計14件（篆刻1件は偽物であり、これを含まない）。

図32 五月五日。隸書六屏『易經』謙卦「謙亨君子有……」

資料：『鄧石如隸書易經謙卦』（天津楊柳青畫社）1988・『完白山人隸書周易謙卦』（青硯書道舎）1994



図 33 六月六日。隸書八屏（拓本）『張氏東銘』「橫渠張先生……」

資料：『書跡名品叢刊』152（二）亥刊 1970

図 34 九月。隸書石碑（拓本）『朱新園捐鑄祭器碑』篆額「朱新園捐鑄祭器之碑」碑文「涇懸學宮禮……」

資料：『書品』第232号・『鄧石如書法篆刻全集』下卷（天津人民美術出版社）2000

5

図 35 月不詳。隸書十屏『敖陶孫評』「敖陶孫評魏……」

資料：『鄧石如法書選集』（北京・文物出版社）1963・『鄧石如隸書集』（台北・學海出版社）1974・『書道藝術』第十卷（中央公論社）1976・『安徽省博物館 鄧石如の書法とその系譜展図録』（皖光新聞社・謙慎書道会・安徽省博物館）1991・『鄧石如書法集』方紹武（黃山書社）1990・『鄧石如書法篆刻全集』第一卷（安徽美術出版社）1993・『中國書法全集』第六七卷（北京市・榮豐齋）1995・『鄧石如敖陶孫詩評』（楊柳青畫社）2005・『鄧石如書法篆刻全集』下卷（天津人民美術出版社）2005。

2、鄧石如隸書作品の形態における特徴

確認できた鄧石如における有紀年篆書作品三十五件の中には、嘉慶九年甲子（1804）六十三歳にみられるような隸書十屏『敖陶孫評』や隸書八屏（拓本）『張氏東銘』のような大作が確認できる。

図24 鄧石如六十歳

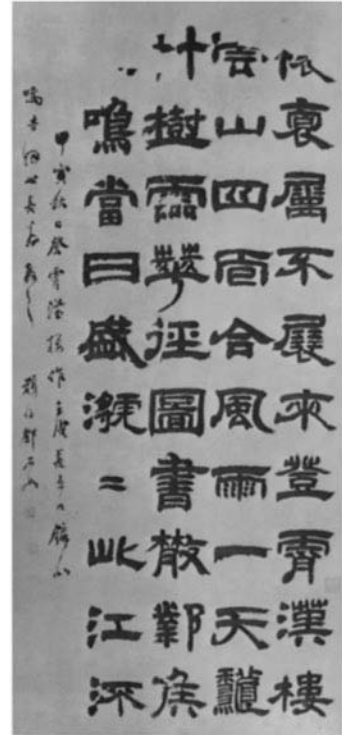
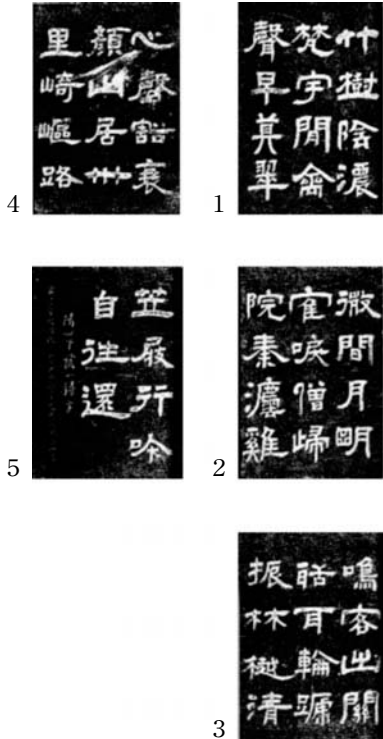


図26 鄧石如六十一歳



鄧石如篆書作品について、立幅・対聯・四屏・四体書四屏・四体書冊頁・五屏・六屏・八屏・横披（横額を含む）・冊頁・碑刻の形態を以下に分類する。

立幅 真跡10件

図3 四十六歳、秋。隸書立幅

図4 四十八歳、四月。隸書立幅

図8 五十歳、十二月。隸書立幅

図9 五十一歳、春。隸書立幅

図16 五十九歳、四月。隸書立幅

図19 五十九歳、冬月。隸書立幅

図20 五十九歳、十一月。隸書立幅

図21 五十九歳、十二月二十四日。隸書立幅

図24 六十歳、十二月二十二日頃。隸書立幅

図28 六十二歳、四月。隸書立幅

対幅 真跡5件

図11 五十一歳、十二月二十二日頃。隸書八言聯

図12 五十二歳、秋。隸書七言聯

図18 五十九歳、七月十六日。隸書八言聯

*

図27 鄧石如六十一歳

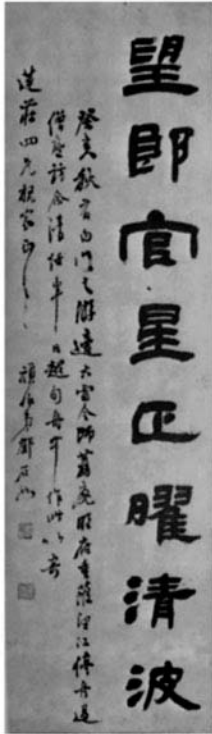
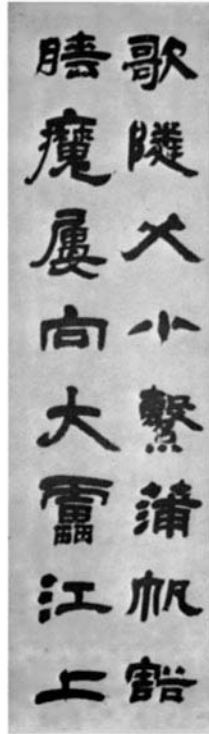
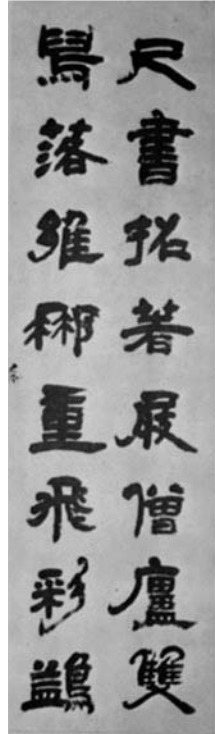
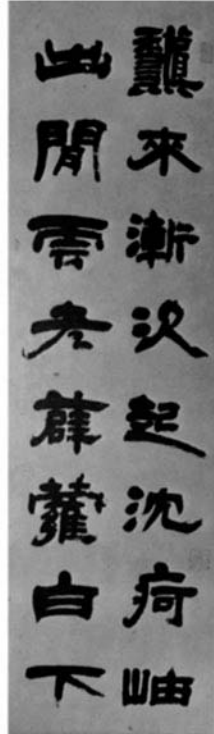


図29 六十二歳、秋。隸書長句（三十七字）聯

図31 六十二歳、十一月下旬。隸書七言聯

四屏 真跡1件

図27 六十一歳、秋。隸書四屏

四体書四屏 真跡2件

図5 四十八歳、十月。四体書屏のうちの隸書幅

図6 四十八歳、十一月。四体書屏のうちの隸書幅

四体書冊頁 真跡3件

図10 五十一歳、十月十八日。四体書冊頁（三開、六紙）

図13 五十五歳、七月十五日。四体書冊頁（三開、三紙）

図15 五十七歳、十一月。四体書冊頁（十二開、二十四紙）

六屏 真跡1件

図32 六十三歳、五月五日。篆書六屏

八屏 真跡2件+拓本1件、計3件

図23 六十歳、十二月。隸書八屏

圖28 鄧石如六十二歲

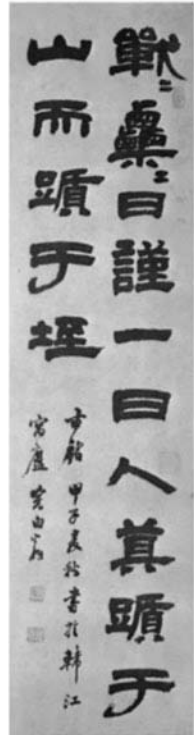


圖29 鄧石如六十二歲

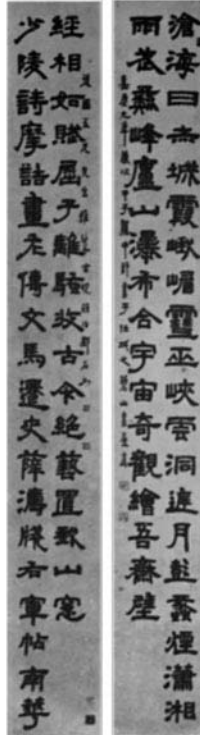


圖30 鄧石如六十二歲



圖30 六十二歲、十月。隸書八屏

圖33 (拓本) 六十三歲、六月六日。隸書八屏

十屏 真跡1件

圖35 六十三歲、月不詳。隸書十屏

橫披 (橫額を含む) 真跡2件+拓本1件、計3件

圖7 五十歲、秋。隸書橫披

圖22 (拓本) 六十歲、五月。隸書額「集賢律院」

圖25 六十歲、十二月二十二日。隸書橫披

隸書冊頁 真跡4件+拓本1件、計5件

圖1 (拓本) 四十四歲、六月。隸書冊頁 (十五紙)

圖2 四十四歲、月不詳。隸書冊頁 (九開、十八紙)

圖14 五十五歲、十月十六日。隸書冊頁 (十六開、十六紙)

圖17 五十九歲、四月。隸書冊頁 (九開、十七紙)

圖26 六十一歲、二月十五日。隸書冊頁 (三開、五紙)

碑刻 拓本1件

圖34 (拓本) 六十三歲、九月。隸書碑刻



以上の分類から、有紀年作品においては、四屏・四体書四屏・六屏・八屏・十屏までの大作と冊頁・四体書冊頁の精作は合わせて十六件で、四割五分程(45.7%)を占めるもので、鄧石如の有紀年の隸書作品の特徴である。また有紀年の立幅・対聯は合わせても十五件で、四割程(42.8%)である。

稿者(遠藤)は、大東書道研究第七号所載『鄧石如(有紀年)作品目録』(1999)「図表一 鄧石如作品形態の分類」における調査によって、篆書作品三十七件(無紀年十五件を含む)、隸書作品四十四件(無紀年十八件を含む)、行草書作品二十八件(無紀年十件を含む)、楷書作品十一件(無紀年五件を含む)であったことを発表した①。これによって鄧石如の最も得意としているところは篆書・隸書であったことの一端を知ることができる。この篆書・隸書でも、篆書に比して隸書作品の数が多く、隸書は鄧石如にとって最も生涯にわたり得意とした書体であった。また行草書作品は、その揮毫にあたっての態度や必要とする時間的からしても篆書・隸書に比して容易であるはずであるが、鄧石如の場合、確認できた作例全体(百二十件)に対して二割三分程(23.3%)であったことは十分に注意しなければならない。

鄧石如は、布衣の人であった。いわゆる中国における文人として

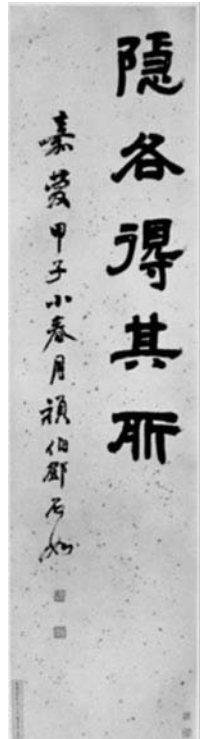
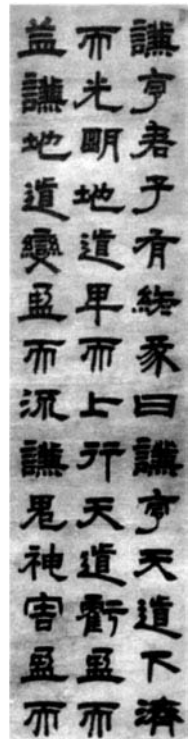


図31 鄧石如六十二歳



図32 鄧石如六十三歳



の活躍すべき場面である科挙試験に無縁であった。そのため鄧石如自身の学問に対する研鑽はあったものの、学問を通じての人的な交流はなく、当然ながら後見人や推薦人は存在しなかった。また家系にも科挙試験に係わった縁族はなく、この点においても鄧石如は孤独であった。

包世臣『完白山人傳』には、著名人との交流がドラマチックに活写されるが、それは、鄧石如が人的交流を得るために縁故を渴望する必死の姿であった。のちに程瑤田・梁獻・梅鏐・張惠言・金榜・曹文植・劉墉・陸錫熊・畢沅などの有力者によって、支援を受けることになるが、これらは全て鄧石如の血縁や学縁とは無縁の人々であった②。

こうした鄧石如とその不遇を支えたのは、鄧石如自身の書作活動と篆刻である。国内の各地を訪ねての売芸が、鄧石如の唯一の生活の糧であった。その売芸の最もの主体は、刻印である。これは実用を兼ね備えており、依頼者自身が用いるものであるからニーズは極めて高く、また即金を得やすいことから至極当然であった。鄧石如の刻印自体の伝存例は極めて少ないが、「鄧石如作品形態の分類」での調査では、印譜や作品に残された印影は二百八件を数えた。

①文中の数字は、一九九九年の『鄧石如(有紀年) 作品目録』に拠ったものである。現在、その数は、資料の増加によって刻印・書作品とも増えている。

禮謙人道慈盈而好謙謙尊而先卑
而不可踰君子之終也象曰地中有
山謙君子以裒多益寡稱物平施初

六謙謙君子用涉大川吉象曰謙謙
君子卑以自牧也六二鳴謙貞吉象
曰鳴謙貞吉中心得也九三勞謙君

子有終吉象曰勞謙君子萬民服也
六四无不利撝謙象曰无不利撝謙
不違則也六五不富以其鄰利用侵

伏无不利象曰利用侵伐征不服也
上六鳴謙利用行師征邑國象曰鳴
謙志未得也可用行師征邑國也

傳曰謙跋扈以守位子臣弟友各
有位序守之以謙禮禮斯著此之
謂君子也輔謙
嘉慶庚辰五月申朔
文忠公八弟石如書

②鄧石如の交流については、小稿「鄧石如年譜詳考」（『大東書道研究』第一五号所収 2007 大東文化大学書道研究所）また小稿「鄧石如における篆書筆法の形成への試論」Ⅱ（『大東書道研究』第三号所収 2016 前同）―第五章、鄧石如の人物交流からみた書法の影響―に詳述したので参照願いたい。

3、鄧石如以前とその後の隸書の概観

篆書は、前二二一年に行われた、秦の始皇帝（前259―前210）の文字統一に始まる。『史記』（秦始皇本紀）によれば、始皇帝は紀元前二二〇年から国内巡幸を行い七つの刻石を建碑し、その揮毫にあたったのは丞相の李斯（前284頃―前208）とされる。この遺例として、現存するものに『泰山刻石』（前219）と『琅琊臺刻石』（前219）があるが、ともに残石である。また『嶧山刻石』（前219）『會稽刻石』（前210）などは、重刻・複刻が伝わっている。

始皇帝による文字統一は、戦国の七雄のうちの秦を除いた六国の文字を廃止したもので、篆書以前の文字は「古文」とよんだことから「六国古文の廃止」ともいわれる。また始皇帝が統一した文字は、戦国の秦の文字をもとにして作ったことから、戦国の秦の文字を「大篆」とよび、統一後のものを「小篆」とよんで区別している。大篆の遺例としては『石鼓文』（戦国・秦、異説あり）がある。

図33 鄧石如六十三歳



篆書の文字構造は左右相称を原則とし、運筆は点画に肥瘦のないもので、その嚴格は始皇帝の權威をしめすには十分であるが、実用には不向きなものであった。このため篆書は一般化しないままに儀礼書体として名残を留めるほどで、漢代になると正書体として隷書が、補助書体として草書がひろく人々に受け入れられ、篆書は、隷書碑の『孔宙碑』（164）『西嶽華山廟碑』（165）『韓仁銘』（175）『張遷碑』（186）などの篆額となって見ることができ

る。
 隷書の成立について旧説は、篆書から隷書が生まれ、初期は篆書を直線化した「古隷」がおこなわれ、のちに波磔（横画または斜画の終筆をうねらせる表現）を強調する「八分隷（分隷ともいう）」がおこなわれたという説である。これは、二十世紀に入ってから新出発見された竹簡・木簡を知らなかったことによる誤解である。確かに漢代の石碑を時系列でならべると旧説になるが、元康四年（前62）木簡には完成された八分隷が書かれている。このことから古隷と八分隷は文字のスタイルとして並存し、後に書写体であった八分隷が正式書体として石碑に用いられたと考えられている。

前漢の後期には『魯孝王刻石』（前56）『萊子侯刻石』（前16）がある。後漢になると崖面（摩崖ともいう）に刻された『開通褒斜道刻石』（66 参考1）がある。いずれも直線化した筆画で書かれ、



図34 鄧石如六十三歳

篆書からは完全に異なった書体となって古隸と呼ばれている。後漢の後期には『石門頌』（148）『乙瑛碑』（153 参考2）『禮記碑』（156）『史晨碑』（169）『西狹頌』（171）『曹全碑』（185）『張遷碑』（186）があつて漢隸の代表とされるが、いずれも八分隸と呼ばれている。

三国時代（魏・呉・蜀）になると、魏の曹操が「立碑の禁」を實施して、石室（石造の墓）・石獸（墓道を飾る石像）をふくむ故人の顕彰碑・墓誌銘の建立を全面的に禁止（建安一〇年 205）した。これは後漢に流行した葬礼の盛大化が、国力を減じるまでに影響したことが理由とされる。ついで、西晋の武帝も禁令を行った（咸寧四年 278）。魏の隸書碑には『孔羨碑』（235 参考3）『范式碑』（235）『三体石經』（240―248）があり、篆書と隸書が混体したものに呉の『天發神讖碑』（276）がある。また、西晋の『皇帝三臨辟雍碑』（278）がある。魏の隸書は、漢隸と区別して「魏隸」と呼ばれる。

こうした政治的影響や書道史的変遷をよく受けて、隸書は急速にその筆法と書き手を同時に失うことになった。葬送の備えるべき儀式である石刻の墓誌は、地上の建立ができないことから土中に埋めることとなって継承された。三国時代以後、南北朝に分かれたのち隋による統一を待つまでの二七十年間ほどは、南朝での石刻は

図35 鄧石如六十三歳



極めて少なく、隸書では『爨寶子碑』（405）が知られる。また出土資料に『王興之墓誌銘』（340）がある。『王興之墓誌銘』は楷書とする説もある。北朝は、北方の外來族が支配して龍門の造像記が良く知られるところである。北朝の隸書碑には、『中岳靈廟碑』（北魏 456）『沮渠安周造像碑』（北涼 445）『西嶽華山神廟碑』（北周 567）などがある。

唐代初期の隸書には、歐陽詢『房彦謙碑』（631）や玄宗『紀泰山銘』（726）同『石臺孝經』（745）がある。『房彦謙碑』は魏隸の系統に連なるもので、『紀泰山銘』『石臺孝經』は漢隸を復活させて堂々たる皇帝の威厳を示している。また史惟則（生没年不詳）や徐浩（702—782）などの隸書を得意とした名家がいる。

唐代の中期に登場した李陽冰（生卒年不詳）は、それまでわずかに見るほどであった篆書を復活させ『城隍廟碑』（759）『三墳記』（767）『般若臺題記』（772）などを残した。李斯とともに『二李』と称され、玉箸篆とよばれた。宋代になると、復古の精神は学問へと向かうことになる。北宋では『說文解字』研究を進めた徐鉉・徐鉉の活躍があり、また歐陽脩『集古録跋尾』（1064）や帝室における『宣和博古圖』（1107—1110）、また南宋では薛尚功『歷代鐘鼎彝器款識法帖』（出版年不詳）によって、古代文字への関心は『金石学』となってひとつの世紀を迎えるこ

有籍東香
 該如堅如
 氣優如巷
 柳工埋帝
 子行泉會
 序鄉斷露
 如飲釵盤
 高騰臥無
 蠶獻數禘
 燭秩塞多
 既如松欲
 雲時張孟

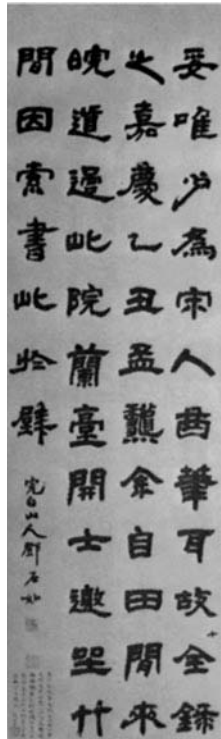
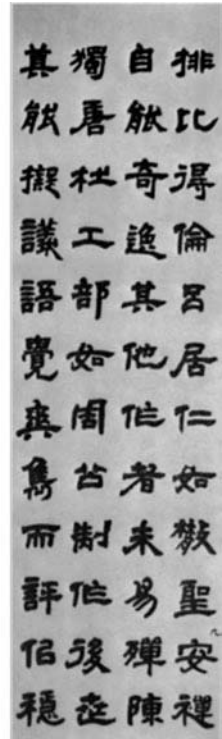
溥朝顯晚
 變蘇鐵孤
 館東經歛
 百坡綺李
 怪如恣羲
 終屈瓊山
 歸注妍如
 雄天要百
 渾陽非寶
 歐連透流
 台滄用蘇
 如潢宋干

元山如四
 而甘鄧瑚
 松如艾ハ
 風陶縫璉
 之尹兵正
 夢景入可
 故入蜀施
 在官要之
 梅析以宗
 聖理險廟
 俞談絶節
 如功為台

不九時閩
 常鼻女河
 讞獨出放
 賞喉春淄
 韓洩終躡
 子林傷息
 蒼孤婉無
 如芳弱聲
 黎冲陣素
 園寤后少
 按自山游
 樂妍如如

とになる。篆書を能くした人物に郭忠恕（?—977）や夢英（生卒年不詳）がいる。こうして唐代中期から北宋にかけて篆書への復古は一世の時流となったが、隸書への関心は高まりを見せなかった。元代は、モンゴル族による支配と漢族への圧政から、政治学問の主体であった知識人は存在を失い、文芸は低調であった。書は、趙孟頫（1254—1322）が一代を象徴したが、王羲之書法の墨守一心にとどめて、新味といえば草書の流行をみるほどであった。明代初期は、元との交代期で書も低調で沈度（1357—1434）・沈粲（生没年不詳）が連綿草を条幅に表現したほどであった。中期には祝允明（1460—1526）・文徵明（1470—1559）が、後期には董其昌（1555—1636）が、また明末清初には黄道周（1585—1646）・張瑞圖（1570—1639）・倪元璐（1593—1644）・王鐸（1592—1652）・傅山（1607—1684）などの人々が活躍するが、その本領は行草書にあった。僅かに小字の隸書を見ることがあるが、従来の伝統的な魏隸を踏襲するもので、漢碑にその本質を見ようとするものではなかった。

清代初期は、康熙帝・乾隆帝が董其昌を愛賞としたことから、宮廷における能書の官僚たちも董其昌の書風に追随した。中期には、揚州において塩業を背景とする新興財閥が文人を擁護し、全く書の



参考1 『開通褒斜道刻石』部分



参考2 『乙瑛碑』部分



伝統に拘束されない「怪」と称される奇想派が活躍した。のちに揚州八怪」と称された金農（1687—1763 参考4）・鄭燮（1693—1765）らの人々は隷書を手掛けていたが、金農の「漆書」とよばれた平筆（刷毛）を用いたような隷書や、鄭燮の楷行草書に隷書を交えた「七分半書」と呼ばれた混体書は、まったく漢隷・魏隷とは無縁のものであった。

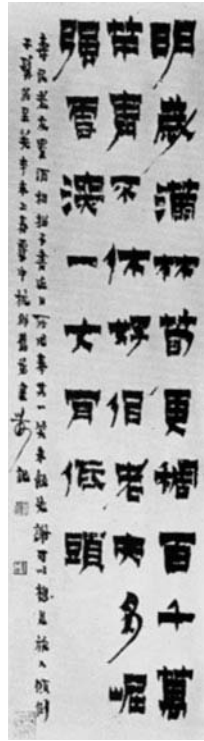
清代中期になると程邃（1607—1692）を盟主とする「徽派」と、丁敬（1695—1765 参考5）を盟主とする「浙派」を形成するほどに印人を輩出し、篆刻は文墨の一端を占めるほどに隆盛した。これらの印人たちは、印の漢代への復古と期を同じくして隷書も積極的に手掛けていた。丁敬・桂馥（1733—1802 参考6）・鄧石如（1739—1805）・黄易（1744—1802）・伊秉綏（1745—1815）は、漢隷に理想を求めた。

阮元（1764—1849）は学者であるが、その書に対する主張である「北碑南帖論」「南北書派論」は、帖学を排して碑学を尊重した。さらに包世臣『藝舟雙楫』や、康有為『廣藝舟雙楫』が、これに賛同して碑学を尊重喧伝すると、それに追随する多くの書家が陸統と登場することで、清代末期は碑学派が多勢を占めて一世を風靡して行った。吳熙載（1799—1870）・何紹基（179

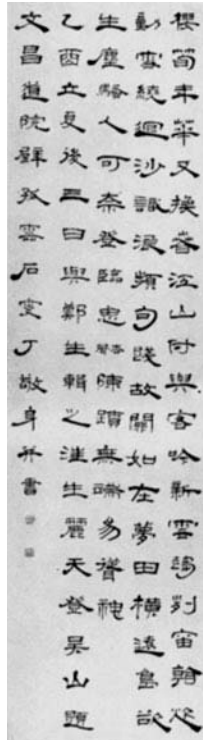
参考3 『孔羨碑』部分



参考4 金農・隸書立幅



参考5 丁敬・隸書立幅



参考6 桂馥・隸書立幅(部分)



9—1873)・楊峴(1819—1896)・徐三庚(1826—1890)・趙之謙(1829—1884)・吳昌碩(1844—1927)らは、漢碑を理想として隸書を手掛けている。こうして清朝後期は、隸書は古隸・八分隸に注目が集まって漢隸復古が主流となり、唐代から明末清初にかけて楷範とされた魏隸は、文人たちからの視界からは遠く離れた存在となった。

—以下は、次号に掲載する—

- 4. 鄧石如の隸書への諸家の言及(Ⅱ)
- 5. 鄧石如の人物交流からみた書法の影響(Ⅱ)
- 6. 鄧石如の有紀年隸書作品からみた書風の変遷(Ⅱ)

結語(Ⅱ)